10/13

統一と革新

統一共産同盟 学対部機関紙

10.13

10.21訪米阻止斗争へ前進しよう！

ー訪ベト阻止斗争総括ー

はじめにー

ベトナム参戦国入りと東南アジア侵略の野望を公然と宣言し、佐藤はついに一人の学友の屍を踏台に訪ベトに出発した。現地羽田における我々青年労働者、学生の佐藤訪ベト阻止の斗いは、今や、政府・マスコミのみならず、他の共産党・「民青全学連」等、あらゆる所から、悪質な批判をあびせられている。我々は、佐藤訪ベト阻止斗争の位置付け・戦術等を総括し事の本質を明らかにしなければならない。

1 佐藤訪ベト阻止斗争に向けての大阪に於ける斗いと全国的な取組みはいかになされたか

佐藤訪ベトは、すでに「統一と革新」10号で明らかにした如く、日本の派兵なきベトナム参戦国入りと東南アジアへの侵略の宣言であり、更に11月上旬の訪米へと続く、70年安保に向けての露骨な攻勢として位置づけた。従って、佐藤訪ベト阻止の斗いは、ベトナム反戦斗争の新たな局面的飛躍的発展を、東南アジア人の侵略、七〇年安保への反撃の斗いの突破口として、更に10.21、佐藤訪米に対する斗いへの突破口としてその意味は重大であった。

(1)こうした意味をもった佐藤訪ベト阻止に向けての斗いは、特に労働者の戦線に於いては極めて不十分なものとして展開された。即ち、共産党は10月8日の〃赤旗祭り〃を口実にすでに決定されていた10.8社共統一行動を放棄し、6日にくり上げてそれを行うだけであった。佐藤訪ベトの前日・当日の斗いは全く放棄するに至ったのである。そして佐藤訪ベト前の10べトナム反戦、沖縄返還の集会をスケジュール主義である。一方、社会党は統括し、10.21をもつという事を口実に、佐藤訪ベトに対する斗いは、ほとんど取組まれ[illegible]10.21当日の統一行動に移った。

(2) 原水禁国民会議の果した画期的役割

こうした社共の斗争放棄のなかで、原水禁国民会議は、八大原水禁大会の決定に基づき、佐藤訪ベトに対する積極的な斗いを展開し、過去の「八六大会と三・一ビキニデーをカンパニアとしてしか斗いえない」という限界を大きく乗り越えた。即ち、大阪に於ては[illegible]を中心に労働者、学生は「大阪一〇〇万人署名」に「佐藤訪ベト阻止」の要望を付け加え、全大阪府内[illegible]、街頭で展開した。茨木、埼玉、東京等の原水禁に於ても、ビラまき、集会を展開しそうした各地域の斗いの上に、佐藤訪ベト阻止の代表団を派遣したのである。

佐藤訪ベトの前日、一〇・七の斗いを社、共斗全く放棄するなかで、原水禁は、佐藤訪ベト抗議集会と、首相官邸抗議デモを提起した。そしてこの斗いは、更に[illegible]の斗いの上に、更に大阪の代表として参加した大阪の代表団、学生(自治会共斗)もその旗のもとに勝ち取ったのである。

2 学生戦線に於ける斗い。

(1) 羽田斗争で勝ち取るべきものは何だったのか。

我々の現地、羽田に於ける佐ト訪ベト阻止の斗いは、先に述べた如く、社共の斗争放棄を始めとする平和、民主勢力のたちおくれの中で、原水禁国民会議、反戦青年委員会、学生を中心に斗いを組まねばならなかった。一方学生戦線に於いても、分裂と混迷の中で、春以来のベトナム反戦の斗いも、全国的な斗争と宗派を形成し得ているとはいえなかった。

政府・独占の反動攻勢は佐ト訪ベト→訪米沖縄と、今や七〇年安保に向けての一連の攻撃が明らかにされている段階で我々斗いの主体の現状を正確に把握し、この秋の一連の斗争の中で七〇年安保斗争を斗う主体をも確立してゆくものでなければならなかった。原水禁・自治会共斗はそのように斗いを位置づけた。

(2) そうした位置付けのもとに、原水禁国民会議は、先に述べた様な訪ベトに向けての斗いを展開し、各地域の県の代表者として現地東京ー羽田へと斗いに結集した。そして、訪ベト前日一〇・七の斗いを唯一国民会議が提起した。我々、自治会共斗は、そうした意義を確認し、そうした地域代表と共に、一〇〇〇名の隊列を組んで、大阪百万署名、抗議文を首相へ副官房長官に渡し、首相官邸デモ→座り込みで、阻止と抗議の行動を展開し、一〇・八の羽田斗争にむかった。

一〇・八羽田斗争は、先に述べた如く現地の斗いの部隊は、反戦青年委員会、自治会共斗、三派全学連のみで、今だ訪ベト阻止に向けての有効な斗争を形成しえていない事、力量に於いてこそ、空港突入阻止ー実力阻止が不可能であるという状態に於て、我々の斗いは無意味な「実力阻止」のみを唱えて、大きな犠牲を出し官憲の弾圧の口実を作る事では決してなかったはずだ。即ち「三派」諸君の如く実力阻止を最大の目標として、それができなければ敗北だという立場は敗北主義でもあり誤っている。

我々の現地での斗いは、実力突破ー阻止が不可能な段階に於いて、最大の獲得目標を明確化して斗うことであった。即ち、我々現地での斗いはそれ自体が他の諸運動と切断されて存在しているのではない。我々の一〇・八の斗いは、原水禁国民会議とともに、地域での斗い、一〇・七の斗争等の一つの集約点として存在していたはずだ。従って、我々の一〇・八の羽田斗争を佐ト訪ベトに出発した後、直ちに、訪ベト抗議、虐殺抗議の全面的な斗いを全都、全国に展開し、更に一〇・九〜一一〇・二一の斗争へと発展させてゆく方針のもとに斗われるべきであったのだ。自治会共斗に於ても、若干の悪方針があり、現地斗争→実力突破に流れていた。

3 佐ト訪ベトに対して全面の斗いを展開し更に一〇・二一訪米に対する斗いに、前進せよ！

すでに全国的に、佐ト訪ベトと虐殺に対する抗議の斗いが起こりつつある。我々は、この斗いの過程で、徹底して、佐ト政府の反動性と、侵略の野望のためには虐殺をも辞さないという、ファッショ的な弾圧をバクロしてゆかねばならない。そしてその怒りを更に一〇・二一佐ト訪米に対する斗いへと発展させてゆく必要がある。

特に一〇・二一は佐トのベトナム入りの日である。その一〇・二一にアメリカ人民百万人、フランス十万の人民と連帯し、国際的なベトナム反戦斗争に連帯した斗いで、佐トベトナム入りに反撃を加えねばならない。